

平成22年度

平和大使長崎派遣事業報告書

平和の祈りを



松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使長崎派遣募集	3
平和大使名簿	5
平和大使長崎派遣行程	7
平和大使長崎派遣報告会	13
平和大使の報告	15
「私にできること」	櫻井和奏・・・・16
「平和大使になって感じたこと」	吉田彩乃・・・・17
「初めての体験、初めての気持ち」	三橋若奈・・・・18
「長崎派遣を終えて」	笹本幸輝・・・・20
「65年前のあの日」	比嘉祐哉・・・・21
「平和について」	後藤奈穂美・・・・22
「平等な平和の世界へ」	神部ちひろ・・・・24
「長崎派遣を終えて」	田中萌加・・・・25
「平和大使として学んだこと」	高梨望・・・・26
「長崎で学んだ事」	岸田穰士・・・・28
「長崎の強さ」	大山祭・・・・30
「長崎に行って思ったこと」	渡邊誠嗣・・・・32
「今、わたしができること」	梶浦美樹・・・・34
「長崎」	斉藤温人・・・・36
「世界に永久の平和を」	富永由也・・・・37
「平和について」	石井拓海・・・・38
「長崎平和大使」	中川剛志・・・・39
「長崎で学んだことを忘れない」	向田美紀子・・・・40
「平和への思い」	山本ありさ・・・・42

「長崎で学んだこと」	新 倉 花 菜 43
「平和の再確認」	田 村 陽 香 44
「命の大切さ」	染 谷 日向子 45

平和大使長崎派遣事業を終えて	47
--------------------------	----

長崎平和宣言（平成22年8月9日）.	50
----------------------------	----

平和大使長崎派遣にあたって

松戸市は、昭和60年3月に「世界平和都市宣言」を行い、これまでさまざまな平和事業を実施して参りました。

65回目の原爆の日を迎え、6日の広島に続き9日には長崎市で平和祈念式典が開かれました。核兵器保有国が初めて代表を送るなど核兵器廃絶を模索する世界的な流れが出来つつあることを確認するとともに、65年という年月が原爆投下を過去のものとして、呑み込みつつある時代のうねりを感じざるをえません。

式典に参列できる被爆者の方も年々少なくなった状況の中、当時の様子を知る術が少なくなっていることにより、被爆体験や戦争体験の風化が懸念されるところです。私達は、直接戦争体験を聞ける最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、未来を担う若い世代に継承することが、今、課せられた使命であると認識しています。

併せて、世界平和都市宣言の理念である世界の恒久平和を念願するということから、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、広い視野に立った施策が重要であると考えております。

平和大使長崎派遣事業を通して、松戸市の次代を担う若い世代が、被爆地へ行くことにより被爆の実相や平和の尊さを学習し、また、学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことを期待して、本事業を実施してまいりたいと存じます。

世界平和都市宣言

我が国は、世界で唯一の被爆国である。
何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。
しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。
かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

World Peace City Declaration

[英語]

Mach 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nation wide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

世界和平都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力,坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

平和大使長崎派遣募集

世界平和都市宣言事業 第3回「平和大使長崎派遣」大使募集

<募集要項>



・松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言により、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

<対象>

・市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、事前、派遣、事後研修に参加できる人を対象とします。

<定員>

・22名（応募者多数の場合は、抽選とします。）

引率：松戸市役所 総務企画本部 総務課職員3名 ・ 添乗員1名

<費用>

・市の負担：長崎への往復航空運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、

8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食。

・自己負担：事前、事後研修の会場（市内）までの交通費、8/7の昼食など

<申込方法>

・参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

<提出期限>

・平成22年5月27日（木）

＜研修日程(予定)＞

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。(自主学習)

7月11日(日) 結団式及び第1回オリエンテーション
青少年ピースフォーラム等の内容説明。

7月25日(日) 第2回オリエンテーション
戦争、原爆、平和等について自主学習します。

8月 1日(日) 第3回オリエンテーション
自主学習とスケジュールの確認。

2 派遣研修

(1) 場所 : 長崎市

(2) 期間 : 8月7日(土)～8月10日(火) 3泊4日

(3) 内容 : 青少年ピースフォーラムへの参加等

＜青少年ピースフォーラム＞

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4) 「平和大使長崎派遣」日程表

8/7(土)	松戸駅 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル (自主学習)	
8/8(日)	午前	自主学習
	14:00～15:00	開会行事(被爆体験講話など) ＜場所:平和会館ホール＞
	15:10～17:00	参加型平和学習(屋外) ＜場所:原爆落下中心地碑、浦上天主堂など＞
8/9(月)	午前	平和祈念式典への参列 ＜場所:平和公園＞
	13:30～15:30	参加型平和学習(屋内) ＜場所:平和会館ホールまたは原爆資料館＞
8/10(火)	ホテル → 長崎空港 → 羽田空港 → 市役所帰庁 → 市役所解散	

3 事後研修

研修の報告会を行うとともに、研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、活動報告書の作成などを行います。

平和大使名簿

さくらい 櫻井	わかな 和奏	(第一中学校	2 学年)
よしだ 吉田	あやの 彩乃	(第二中学校	1 学年)
みつはし 三橋	わかな 若奈	(第三中学校	1 学年)
ささもと 笹本	こうき 幸輝	(第四中学校	2 学年)
ひが 比嘉	ゆうや 祐哉	(第五中学校	2 学年)
ごとう 後藤	な お み 奈穂美	(第六中学校	1 学年)
かんべ 神部	ちひろ	(小金中学校	2 学年)
たなか 田中	もえか 萌加	(常盤平中学校	1 学年)
たかなし 高梨	のぞみ 望	(栗ヶ沢中学校	2 学年)
きしだ 岸田	じょうじ 穰士	(六実中学校	2 学年)
おおやま 大山	まつり 祭	(小金南中学校	1 学年)
わたなべ 渡邊	せいじ 誠嗣	(古ヶ崎中学校	2 学年)
かじうら 梶浦	み き 美樹	(牧野原中学校	2 学年)
さいとう 斉藤	あつと 温人	(根木内中学校	1 学年)
とみなが 富永	ゆうや 由也	(河原塚中学校	1 学年)
いしい 石井	たくみ 拓海	(新松戸南中学校	2 学年)
なかがわ 中川	つよし 剛志	(金ヶ作中学校	1 学年)
むかいだ 向田	み き こ 美紀子	(和名ヶ谷中学校	3 学年)

やまもと

山本 ありさ （旭町中学校 2 学年）

にいくら

か な

新倉 花菜 （小金北中学校 1 学年）

たむら

ひかり

田村 陽香 （聖徳大学付属女子中学校 2 学年）

そめや

ひ な こ

染谷 日向子 （専修大学松戸中学校 1 学年）



〈平和大使結団式〉

平和大使長崎派遣行程

8月7日（土）

◆ 11：00 長崎へ出発

11時松戸駅に集合して、保護者、教頭先生、関係者に見送られ出発しました。

13時25分発スカイネットアジア航空37便で、羽田から長崎へ向かいました。

15時20分長崎空港着。バスでホテルへ向かいました。



〈羽田空港〉

◆ 19：00 千羽鶴作成（ホテル会議室）



〈千羽鶴作成中〉



〈千羽鶴完成〉

8月8日（日）

◆ 8：55 自主学习 （Aグループ）

立山防空壕では、説明員の方から当時この場所にいた方の証言や防空本部が果たしてきた役割を詳しく説明して頂きました。防空壕内は夏であっても大変涼しかったです。路面電車を乗り継ぎ、新地中華街を散策しました。



〈立山防空壕見学〉



〈中華街〉

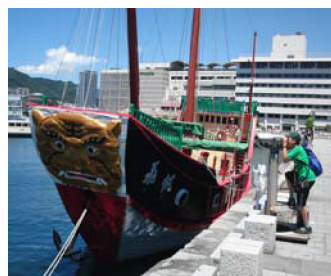
◆ 8:00 自主学習 (Bグループ)

長崎歴史文化博物館では、海外交流史に関する歴史資料や美術工芸品などの貴重な資料を説明員の方がわかりやすく説明してくださいました。坂本龍馬も実際に訪ねた長崎奉行所(復元)を見て、大河ドラマで活躍した風雲児龍馬が蘇りました。



〈長崎歴史文化博物館見学〉

路面電車を乗り継いで、博物館のほか新地中華街も巡り、鎖国時代に貿易港として華やいた当時の様子を窺い知ることができました。



〈出島ワーフ〉

◆ 13:00 原爆資料館到着

青少年ピースフォーラムに参加するために、会場へ向かう途中、昨日作成した千羽鶴を持参して「平和の祈りを全ての命へ」という想いとともに関爆資料館へ献納しました。



〈千羽鶴献納〉



〈松戸市の千羽鶴〉

◆ 14：00 青少年ピースフォーラムに参加

平和会館ホールで、全国から31団体、267名が参加しての開会行事に続き、被爆体験講話を永野悦子^{ながのえつこ}さんから話を聞きました。

これからは、コースに分かれて参加型の学習が始まります。



〈ピースフォーラム開会行事〉



〈コース別学習〉



〈講話者 永野 悦子 さん〉

◆ 15：10 被爆建造物等のフィールドワーク（平和公園コース）出発

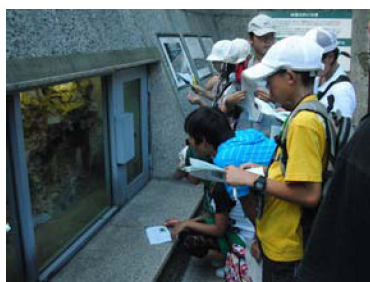
長崎市青少年ピースボランティア（高校生・大学生など）の方が、原爆落下中心地碑や下の川、また、被爆当時の地層など当時の様子を親切に説明、案内してくれました。



〈原爆落下中心地碑〉



〈下の川〉



〈原爆当時の地層〉



〈浦上天主堂遺壁〉



〈青少年ピースフォーラムボランティアさんと記念撮影〉

◆ 17：00 自主学習

原爆資料館を見学。ここでも市民ボランティア（平和案内人）の方が資料について、分かりやすく説明してくださいました。大使たちは真剣な面持ちで説明に聞き入っていました。



〈原爆資料館内〉



〈原爆資料館内〉



〈原爆資料館内〉

原爆資料館に続いて、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館へ行きました。

ここは、なんともいえない厳粛な雰囲気の中で、名簿と遺影や手記を公開していました。

◆ 19：00 ミーティング（ホテルにて）

明日の日程の確認を行いました。

8月9日（月）

◆ 9：00 平和祈念式典参列（平和公園内）

8時30分原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ
参列するために、出発！路面電車で移動しました。

原爆犠牲者のご冥福、世界の恒久平和を祈りました。

式 次 第

- 10時35分 被爆者合唱
- 10時40分 開式
 - 原爆死没者名奉安
- 42分 式辞（長崎市会議長）
- 46分 献水
- 48分 献花
- 11時02分 黙とう
 - 03分 平和宣言（長崎市長）
 - 13分 平和への誓い（被爆者代表）
 - 18分 児童合唱
 - 23分 来賓挨拶
 - 38分 合唱
 - 43分 閉式



〈平和祈念像〉



〈大使参列〉



〈黙とう〉



〈平和の泉〉

◆ 13:30 ピースフォーラム参加

コース参加者 80 名を 10 班に分けて、それぞれの班で昨日フィールドワークで学んだことをふまえ、被爆の実相についてまとめを行うとともに、意見交換を通して、平和の尊さについて考えました。

また、身近な平和についても考えました。

全国から参加された方々と交流することができ貴重な体験をすることができました。

最後に、ピースフォーラム終了証書をいただきました。



〈人間知恵の輪で交流〉



〈意見交換〉



〈各班のまとめ〉



〈発表〉



〈班の記念撮影〉

ピースフォーラムも終了して、自由時間です。長崎駅前へ行きました。

夕食を済ましてから夜の大浦天主堂・グラバー園を散策しました。夜景がとても綺麗でした。



〈大浦天主堂〉

8月10日（火）

◆ 9：00 松戸へ出発

9時ホテルを出発。長崎空港へ向かいました。

11時発全日空 664 便で羽田へ向かいました。

12時40分羽田空港着。バスで市役所へ向かいました。



〈長崎空港〉

◆ 15：20 松戸市役所到着

3泊4日の日程で長崎へ行って参りました。みんな元気で帰ってくることができました。

平和大使長崎派遣報告会

8月10日（火）新館7階会議室にて

◆ 15：30 帰庁報告会

松戸市役所で、市長に長崎で体験してきたことを大使一人ひとりが報告しました。



〈帰庁報告会〉



〈帰庁報告会〉

平和大使の中学生 長崎訪れ「胸痛む」

松戸市役所で報告会

長崎市で開かれた平和祈念式典や青少年ピースフォーラムに松戸市が平和大使として派遣した中学生22人の帰庁報告会が10日、同市役所で開かれた。全員が強い衝撃を受けたようで、派遣の体験を周囲に伝えていきたいなどと決意を語っていた。写真。

22人は、7日から3泊4日



の日程で長崎市の爆心地などを訪ね、被爆者の話を聞いた。他都市から来た学生と交

流したりした。

報告会では一人ひとりが胸のうちの語った。教会の柱が動くほどの爆風のすさまじさ、戦争が終わっても後遺症を残す原爆の恐ろしさに驚き、被爆者の体の傷を見て「胸が痛んだ」と語った学生もいた。

同市の平和大使派遣事業は、「核兵器のない平和な未来を築く心を育んでもらいたい」と2008年から始まった。今年は市内の中学校22校から各1人が選ばれた。

長崎訪問の中学生平和大使が帰庁報告

「原爆のむごさ知った」

松戸

中学生に平和について考える世界になるのかを考えた。もう松戸市の平和大使だと思いましたが、など現地を長崎派遣事業で、被爆地で抱いた思いを語った。の長崎市内に派遣された平和大使は3泊4日のスケジュールで長崎を訪問。大使22人が10日、松戸市役所を訪れ、本郷谷健次市長に帰庁報告した。大使たちは「原爆のむごさを知りま

学生たちが集まって交流をした」「どうすれば平和な深める青少年ピースフォー

ラムに参加したりした。

10日、長崎市から松戸市



長崎市訪問について報告する松戸市の平和大使

に帰ってきたばかりの大使たちは一様に引き締まった表情。被爆者の話を直接聞いてショックを受けたことや核兵器の恐ろしさなどを一人一人が語った。今回の体験を家族や友人たちに伝えたいという意見も多く出

た。

同事業は今年で3回目。市内の中学校に平和大使へ

の参加を募集し、今回は69人の応募があった。その中から13年生の22人が抽選で選ばれた。平和大使のリーダーとして参加した同市立第五中学校2年の比嘉祐哉君(14)は「被爆者の生の声を聞いて胸が痛くなりました」。同市立和名谷中学校3年の向田美紀子さん(15)は「普通の生活ができることが平和なんだと感じました」と話した。

平 和 大 使 の 報 告

『私にできること』

第一中学校 2年 櫻井 和奏

私は、戦争というのはどういうものなのかをもっとよく知りたくて、この平和大使長崎派遣に応募しました。

そして、松戸市の代表として、これからの日本を創っていく一人として、一から、しっかり勉強してこようと決意しました。

三泊四日という、短い日程の中でしたが、私の戦争に対する想いは大きく変わりました。

長崎原爆資料館は、原爆地ならではの資料も数多く、目をそらしたいものもありました。

そして、原爆落下中心地碑、平和の泉、大浦天主堂など、どこを見ても被爆者の方達の悲しい顔が浮かんできました。しかし、現地の方々はしっかり前を向き、正面から向き合おうとしていました。そんな方々を目にして、私の気持ちは全く変わりました。

「どうして私たちが・・・」「悲しい」「辛い」という気持ちで終わらせず、「この先、同じことが起こらないようにするためには」と一歩踏み出した遺族の方々やボランティアの人に続いて、一人でも多くの方が笑顔になれるように、自分にできることを、一つずつ始めていこうと思います。

そして、たくさんの人に支えてもらって実現できたこの体験を、これからの日本の未来のために、大きく活かしていきたいです。

『平和大使になって感じたこと』

第二中学校 1年 吉田 彩乃

平成22年8月7日から10日まで平和大使として長崎へ行って来ました。

その中で私が一番心に残ったことは被爆者の方の話でした。被爆者の方は原爆地に近かったけど運よく家族の中では、彼女とお父さんだけが生き残ったそうです。原爆当時、家族を探していた時、周りに死体がゴロゴロ転がっていたと聞いてとても怖かったです。原爆は恐ろしくて思い出したくなかったでしょうが、私たちのために話してくださってとても感謝しています。

次に印象的だったことは長崎原爆資料館でみた女子高生のお弁当箱でした。その中に入っていたご飯が原爆の影響で炭化したものでした。私は原爆の力があまりにも大きかったと感じました。他にも当時の写真や溶けたガラスのビンなどが展示されていて見ていられなくなりました。

3日目式典に参加して、11時2分に黙とうしている時は、65年前原爆が落ちたということを思うと私は少し不安になりましたが、もう二度と原爆がない世界を祈りました。

私はこれから、原爆の恐ろしさを、みんなに伝えていき、原爆はどのくらいの衝撃なのか知ってもらいたいと思います。そして原爆のことが世界中に広まり、世界が一つになり核兵器のない平和を作っていけたらいいなと思います。

最後に貴重な体験をありがとうございました。

『初めての体験、初めての気持ち』

第三中学校 1年 三橋 若奈

私は平和大使として長崎へ行って、初めての体験ばかりしました。立山防空壕で防空壕を見学したこと、被爆者体験講話を聞いたこと、平和祈念式典に参加したことなど、全部が初めてでした。それどころか、長崎に行ったことも初めてでした。そんな初めての体験ばかりの中で、たくさん感じたことや思ったことがありました。

長崎に来てまず初めに思ったこと。それは、「この街に、本当に原子爆弾が落ちたのかな？」です。今の長崎の街は、言われてもわからないほど、ごく普通の街でした。そして、「原爆が投下される前もこういう普通の街だったのかな？」と考えると、長崎市民とごく普通の街を襲った戦争と原爆が許せなくなりました。

そして、次に感じたのは、立山防空壕で初めて見た防空壕内でのことです。初めて見学した防空壕内は暗くて少し怖くて、この中に人々が逃げてきたと考えると、「その人たちはどういう気持ちでこの中にいたのかな？」と思いました。私は今までこういう風に人の気持ちを考えたことはなかったので、自分の考えなのに、少し変な感じがしました。

他にも平和祈念式典や青少年ピースフォーラムなどで色々と感じたことや思ったことは書ききれないほどありました。三泊四日の間にこんなにも感じたり思ったり学んだりしたのは初めてでした。それに、新しい友達もたくさんできて、とても良い三泊四日でした。そして、こういう風に過ごせることがとても幸せなことだ、というのも良くわかりました。

ですが、今世界中では核兵器を持っている国がたくさんあります。ということは、世界中の誰かが、広島や長崎の人たちと同じ思いをする人が出ることです。そ

うなるのは悲しいと思うので、私は、この世の中から核兵器を無くしていかなければいけないと思います。

『長崎派遣を終えて』

第四中学校 2年 笹本 幸輝

僕が今回長崎に行きたいと思った理由は、昨年友達がこの事業に参加していたからです。友達は、一生懸命に教えてくれましたが見たことのない原爆の恐ろしさは、想像できませんでした。なので、この事業に参加してみたいと思ったのです。

僕が今回学んだことは、まず原爆の恐ろしさです。たった1個の原爆で浦上天主堂が壊れ、七万四千人が死に、七万五千人が負傷し、いまだに放射線による後遺症に苦しんでいる人々がいます。こんな恐ろしい原爆を持っている国がいまだにあることが許せません。被爆者の永野さんの話では、弟と妹が原爆で亡くなってしまうということがあり、悲しみながら生きてきたと思うと胸が痛みました。

次に学んだ事は、平和の大切さです。青少年ピースフォーラムでは、日本全国から集まった人達と一緒に平和の尊さを学びました。また平和な時と平和でない時に分け、平和でない時の解決策を考えることで平和とは、何かを学びました。

僕は、学んだことを家族や友達にしっかりと伝えて『平和の輪』を広げていくことが大切だと思います。今回、いろいろな国が平和祈念式典に出席したのは、平和が大事だと思われはじめたからだだと思います。それらの先頭に立ってこれからリードしていくのは、唯一の被爆国である日本です。そしてこの国の未来を担うのは、若い僕達だと思います。だからこれらのようなことを真剣に受け止めて考えることで少しでも世界の平和に近づくとと思います。この貴重な体験をこれから生かして行きたいです。

『65年前のあの日』

第五中学校 2年 比嘉 祐哉

僕は、この夏に学校では学ぶ事のできない事を沢山学ぶことができました。

長崎に行って二日目に被爆者の方からのお話を聞きました。その時に話をしてくれた永野さんが言った言葉が忘れられません。「65年前の8月9日11時2分の出来事を忘れないでください。」僕は、その時に絶対に忘れないと言うよりも、絶対に忘れられないなと思いました。

僕は、長崎で傷ついた人達や壊された建物の写真を見て、戦争や核兵器、放射能の恐ろしさを感じました。

真っ暗な防空壕にも入りました。被爆者の話を聞き、原爆の恐ろしさや被爆者や被爆者の家族の辛さも知りました。戦争は、いけないことと言う事や悲惨な事ということは、学校の授業などで分かっていたけど、長崎に行って、全然分かっていなかったと思いました。

平和祈念式典では、11時2分に全員で黙祷をしました。その時の1分間は、とても長く感じました。65年前のこの日、この時に原爆が落とされたと思うと今までに、感じたことのない思いになりました。

「もう二度と戦争をしては、いけない！」核兵器や戦争のない世界にしないといけないと思いました。

僕が長崎で学んだ事を、少しでも多くの人に伝えていきたいです。

『「平和」について』

第六中学校 1年 後藤 奈穂美

昭和二十年八月九日十一時二分。

この時、長崎に、ファットマン（ふとっちょ）と呼ばれた原子爆弾が投下されました。

原爆とは何か。また、どれだけの被害を受けたのかを調べるため長崎原爆資料館に行きました。

びっくりしたのは、あまりの高熱でぐにゃぐにゃに溶けて形もよくわからない状態になっていたビンです。なぜ私がびっくりしたかということビンやガラスなどは、とても熱い温度でなければ溶けないからです。その、とても熱い温度が原爆によって人間の体も心もすべてをぼろぼろにしたということです。

私は被害にあった長崎の写真が、一番心が痛かったです。皮膚が焼けただれて痛々しい姿の方々や、真っ黒こげになった死体など、焼け野原となった長崎の町などの写真、どれも心が痛み、胸がしめつけられるような、あまりにも無残な姿で残酷でした。

私は、こんなことを人間がするべきことだとは思いません。

また、なぜ、なにも罪のない人達が犠牲にならなければならなかったのかと思うと、とても悲しくなります。

今、私達は、平和な国で暮らすことができますが、今なお、たくさんの国で核兵器を持っています。

でも、私は、戦争や争いなどは決して平和だとは思いません。

私の考える平和は、核もなく、戦争や争いもなく、ゆずり合い、豊かであり、い

つも笑顔でいることだと思います。でも、私一人では、このことを実現することは、不可能です。

それでも、私にはできることが二つあります。一つは、今回長崎に行った事を伝えること。二つ目は、世界が平和になることを願う事です。

そうすれば、きっとこの世界が平和になると思うからです。

『平等な平和の世界へ』

小金中学校 2年 神部 ちひろ

長崎に原爆が落ちてから六十五回目の夏、私は平和大使として長崎に行ってきました。私はそこで多くの事を学んできました。

想像を絶する悲しい歴史の証拠の数々や、今も残る原爆の爪痕、原爆の恐怖などの胸がしめつけられるような内容もたくさんありました。しかし、それらのことを学んだことで、より平和の尊さを考えられました。

そして、私が長崎に行って最も感動し、多くの人に伝えたいと思ったことは「青少年ピースフォーラム」についてです。「青少年ピースフォーラム」とは、平和への意識をより高めるために中高生が集まり、いくつかの議題について語り合う場のことです。今回は、「どんな時に平和を感じるのか?」「どんな時に平和でないと感じるのか?」そして「平和のために今、自分達は何ができるのか?」という三つの議題について語り合いました。私はその三つの議題を通して思ったことが二つあります。一つは、今の世界は、原爆の後遺症や戦争に苦しめられながら生きている人がたくさんいることから、今は「平等な平和」とは言えないということ。もう一つは、今の私が今からできること、すべきことは戦争や原爆を世界からなくすなどのそんな大きなものではなく、日常生活の中で少しでも「平等な平和」をつくりだし、まずは自分の周りの人達に平和を感じてもらうことです。そうして、少しずつでも自分の身近な生活から平和を広げていくことは世界の「平等な平和」への第一歩だと思います。

簡単なことではないかもしれませんが、少しでも早く世界中が平和な時代がきて、被爆者の方々が心から安心できる時代になってほしいと強く感じました。

『長崎派遣を終えて』

常盤平中学校 1年 田中 萌加

私はこの夏、平和大使として長崎へ行きました。

まず思ったのが、「長崎は普通の街となんらかわらない」ということでした。あの日の1秒前まで、長崎は普通の、どことも変わらない街だったと思うと、なんとも言えない気持ちになりました。

そんな長崎へ行き、心に残ったことが三つあります。

一つ目は、青少年ピースフォーラムで永野悦子さんの話を聞いたことです。永野さんの話は生々しく、思わず耳をふさぎたくなるようなものでした。

二つ目は、原爆資料館で見た、原爆の被害にあった人や物、建造物などについてです。原爆の熱線で黒こげになった人の写真や、十一時二分を指したまま止まっている時計などの物が展示されてありました。

三つ目は、やはり平和祈念式典でのことです。合図と一緒に平和の象徴である鳩が一斉に飛びたった場面や、長崎市長の話などが印象的でした。

私は今回、長崎へ行き学んだ多くの事を一人でも多くの人に伝えていきたいです。そして、一秒でも早く核兵器が無くなるように、自分のできることをしていきたいと思います。

最後に、松戸市役所の皆さま、松戸市民の皆さま、私をこの平和大使として長崎へ派遣して下さったことを心から感謝しています。

『平和大使として学んだこと』

栗ヶ沢中学校 2年 高梨 望

私が平和大使として長崎に行き、体験したことで心に残ったことが二つあります。

一つ目は、長崎原爆資料館で見学した資料の事です。

熱線の被害で、溶けたガラス、沸騰して泡立った瓦などがありました。

私が一番記憶に残ったのは、「全身熱傷の少女」の写真です。皮膚はただれ、はがれ落ち、肉や骨が露出していて、私はそんな写真が怖くなってしまい、直視できませんでした。

爆風の被害で家は吹き飛び、ガラスも突き刺さっていました。

そして放射線。放射線は被爆直後の症状もありますが、私が恐ろしいと思うのは、残留放射線です。爆発のときだけでは終わらず、生き残った人の体を奥深く傷つけて、時がたっても様々な症状を呼び起こします。それは、お腹の中にいる赤ちゃんにも影響してしまっていました。放射線を浴びてから、長い時間がたっても発症するという事は、今でも被爆者に不安を与えていると思います。

二つ目は、被爆者の永野悦子さんの話です。

永野さんの話は、胸が苦しくなり、とても大きな衝撃を受けました。

「弟は全身大火傷で、皮膚がたれ下がっていて、本当に弟なのかと思ってしまった。」

私は原爆資料館で見た「全身熱傷の少女」の写真を思い浮かべ、私も同じ状況で、姉が同じ被害にあっていたら・・・と考えると、悲しくて仕方ありませんでした。

核なんて使ってはいけない、戦争は二度と繰り返してはいけないと改めて強く思い直しました。

戦争や原爆を学ぶ中で恐ろしさのあまり、怖くなってしまったこともありましたが、私に何ができるかと考えると、今回平和大使として知ったこと、感じたことの経験を忘れず、多くの人に伝えることだと思いました。そして、戦争についてあまり知らない人でも、関心をもって学んでもらえるようにしたいと思います。

みなさんに平和を愛する心を広げていきたいです。

『長崎で学んだ事』

六実中学校 2年 岸田 穰士

僕は今回の平和大使長崎派遣で様々な事を学んで来ました。

一つ目は、原爆の恐ろしさです。凄くこわいと考えてはいたけれど、思っていた以上に酷いものでした。平和公園内にある浦上天主堂の一部が、爆風で5センチほどずれていました。これは、爆風が物凄い力だったことを物語っています。また、爆風の他に、飛び散った熱線で、家の瓦が黒く焦げ、ガラスやビンは溶けてくっつき、そして人の皮膚は垂れ下がりました。実際に原爆資料館で被爆した屋根瓦を触ってみましたが、普通の瓦とは大きく違いました。熱線の威力がここまでひどいものだとは思いませんでした。さらに、爆風等と飛び散った物が放射能です。爆風や熱線は見えたり感じたりできますが、放射能はできません。しかし、すぐに症状が出たり、場合によっては何十年もたってから発症する人もいます。何十年もたって発症するなんて恐ろしいなと思いました。

二つ目は青少年ピースフォーラムで聞いた被爆者の永野悦子さんの話です。もがき苦しんで死んだ永野さんの妹がとてもかわいそうでした。

65年前のあの瞬間に何があったのかを聞けて良かったです。被爆者の平均年齢が76歳を越え、語り継ぐ人が段々と減っているので、僕らのような若い世代が皆に伝えていくことが大事なんだと思います。

太平洋戦争のあと、世界では核を作り続け、約二千回もの核実験を行いました。いまだにそれで苦しんでいる人がたくさんいます。

長崎の様な酷いことを、二度と絶対に起こさないでほしいです。平和のために何ができるのか、一人一人が考えていかなければいけないと思いました。

ぼくは、この平和大使として学んだ事を大いに活かして、皆にしっかり伝えていきます。

『長崎の強さ』

小金南中学校 1年 大山 祭

今、核兵器を作っているあなたよく聞いてください。長崎は歴史ある豊かな町でした。だが、一発の原爆で一瞬にして町一つを消しました。そして、たくさんの尊い命を奪い、その後も苦しませ『平和』という文字をこの世から消し去りました。被爆65周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典で発表された原爆死没者名奉安では、なんと152,276人もの方が亡くなっていました。

あなたは どう思いますか？ こんなにも多くの人々が亡くなって今も苦しんでいる人がいるのにもかかわらず、まだ核兵器を作るつもりですか？ 本当にまだ作るというなら『世界平和は皆のものだ、核兵器を作り続けている国に原爆の恐ろしさがわかるもんか』と言いたい！！長崎はいつだって負けない強い意思を持っていて、絶対にめげない強い魂を持っています。

さて、ここからは私が長崎にあって心に残ったものを1つ伝えます。その1つは もちろん被爆65周年長崎原爆犠牲者慰霊平和式典の事です。その中でも特に心に残ったものは黙祷の時です。たった1分の出来事ですがその1分で私の頭の中は原爆の事、平和の事でいっぱいになりました。この1分で私は今自分が伝える事は何なのか？それを気付かされました。それは「平和の為、自分達の手でこの世界を変えていくんだ！」という事と「核兵器をこの世から1つ残らず消して行く！」という事だ。

最後に感謝の言葉を贈ります。松戸市役所の方々本当にありがとうございました。長崎でお世話になった方々本当にありがとうございました。そして、一緒に行った他校の皆ありがとう。この平和大使長崎派遣の思い出は一生忘れる事はない最高の

出来事だった！

『長崎に行って思ったこと』

古ヶ崎中学校 2年 渡邊 誠嗣

僕は、長崎で多大な、そして残酷な歴史のつめ跡を目のあたりにしました。

特に、浦上天主堂の遺壁は、原子爆弾による強烈な爆風を受けて、レンガなどがずれていて、原爆の威力を物語っていました。

今まで、僕は、長崎の人達は、原爆を落として行ったアメリカをとてつもなくうらんでいるのだと思っていました。しかし、現在長崎の人達は「もう、同じ過ちを繰り返してはいけない。」「長崎を、最後の被爆地に。」と叫びながら署名活動を行っていました。武力ではなく、話をして解決しようというところが、とても感動的でした。これから世界は、長崎を見習ってほしい、いや、見習うべきだ。世界の先進が長崎になって、初めて、平和の花が一輪咲くことができるだろう。

もう、歴史を消すことはできない。しかしながら、同じ歴史を繰り返さないということはできます。それを可能にするためには、まず一人一人から、世界に平和を、恒久平和を呼びかけることが、大きな一歩となるでしょう。

今の時代は、恒久平和の一步手前です。なぜなら、武力で支配、制圧する人がいるからです。恒久平和を唱える人達のそばで、あるいは、平和の円の外で、武力が一番と唱える人たちがいるからです。武力で世界を制しても見えてくるのは何也没有什么。きっと、その人達も、円に入っていればよかったのかなあ、とそのうち思うでしょう。その人達が、平和が一番と唱えながら、次々と武力を手放していったときにやっと、世界が恒久平和になるのだと僕は思います。世界が、なぜ武力を捨てないのかは僕もわかります。臆病だからです。しかし現に、武力を捨てた、日本は何事もなく平和ではありませんか。日本は、とても勇敢だったと思います。こ

れからは、武力を捨てる勇敢さが、世界を不安と欲望の渦から、抜け出させてくれるのだろうと思います。

世界の恒久平和を願って、一人一人友達をつくって、世界の国々が仲良くなれば、争うものなどなにもなくなるはずです。僕は、世界から核兵器がなくなり、争いのない世界になることを願っています。

『今、わたしができること』

牧野原中学校 2年 梶浦 美樹

今から六十五年前の八月九日。この日、長崎に原爆が落とされたのです。それだけではなくたくさんの人々の命をうばい、たくさんの人々を悲しませ、苦しめたのです。

わたしは初め、こんなきれいな長崎の町に原爆が落とされたなど考えることができませんでした。しかし、被爆者の方のお話や被爆地を見たり、聞いたりするたびに知らなければならない現実だと思いました。被爆者の方は、思い出したくないであろう、六十五年前の被爆体験をわたし達に話してくださいました。それは、とてもすごいことだと思いました。もし、この被爆体験がわたしだったら、と考えながら聞いていたのですが、「助けて下さい。」「水を下さい。」と、亡くなっていく方々を見てもわたしは何もできず、その体験を語り伝えることもできなかつただろうと思いました。しかし、被爆を体験していないわたしだからこそできることはたくさんあると思います。わたしのできる被爆体験を聴き、家族や友達などたくさんの人々に話していくなどして、平和を守っていきたいです。

とても美しい長崎の下には、六十五年前の住宅の瓦や茶わんなどが地層となっているのです。わたしは、とても驚いてしまいました。そして、亡くなった方々の骨などもあると考えると胸が痛みました。

「語り伝えが核兵器を使わせない力になる。」と、被爆者の方から聞きました。わたしが、長崎に派遣されて改めて感じたことでした。青少年ピースフォーラムでは、他の県の青少年と交流をして世界平和へ一歩、近づけたと思います。

わたしは、この四日間で友達をつくることや語り伝えることも大切なのだと知り

ました。この経験を普段の生活にも活かして行きたいと思います。平和な世界を願って。

『長崎』

根木内中学校 1年 斉藤 温人

ぼくがまず長崎に着いて感じたことは、ごく普通の街と変わらないと思った事です。原爆が落ちたのにもかかわらず普通の街と変わらないことが、とてもすごいことなのではないかと思いました。

ぼくはこの平和大使に興味半分で応募しましたが、日に日に責任という物を実感していきました。

ぼくが長崎に行ってとても印象に残ったことは長崎原爆資料館の展示物です。たくさんある展示物はどこもかしこも目をそむけたくなる物ばかりでした。そしてぼくは戦争についてよく知らないことの方が多いと実感しました。

それと今みんなが使っている教科書にあまり原爆や長崎についての情報が少なすぎると思います。だから原爆への意識が少なくなっていくのではないかと思います。

日本は世界で唯一の被爆国です。世界に原爆の恐ろしさを伝えることができる様に、ぼくが長崎で感じたことや思った事などをみんなに伝えていきたいと思います。

そして平和大使という機会を下さって、心から感謝します。

『世界に永久の平和を』

河原塚中学校 1年 富永 由也

ぼくは、八月七日から八月十日まで、平和大使として長崎に行きました。そして、一日目の青少年ピースフォーラムで聞いた被爆者の話にぼくの心は動かされました。

その内容を簡単に説明すると、彼女は、妹と弟が疎開していましたが、さみしくてたまらなくなり、母の言葉を見捨てて二人を長崎に連れ帰りました。その後、原子爆弾が落とされて、妹と弟と母を次々に亡くしました。彼女は、自分のせいで妹と弟が死んだのだと後悔していると話していました。

この話を聞いた時、かわいそうだと思ったと同時に、いったい誰が悪いのかと考えました。家族と一緒に暮らしたいと思うことは、悪いことなのでしょうか。ぼくはそうは思いません。でも、ニュースを見たり、本を読んだり、人の話を聞いたりしても、誰が悪いのかわかりませんでした。とても入り組んだ問題なのだと思います。

それでも、二度と同じような事を起こさないために、具体的な対策は必要だと思います。

ぼくは、すべての国が交流し、戦争や平和について話し合えばいいと思います。友達とケンカをした時も、話し合ったら無駄だと思うことはあるけれど、誤解が解けたり、仲直りできたりすることもあります。世界中の人が、他の国の人ともそういう関係になれば、争いは減っていくのではないのでしょうか。

これからは、ぼく自身も、友達や他の国の人とも積極的に戦争や平和についての話をし、もっともっと勉強していきたいと思っています。

『平和について』

新松戸南中学校 2年 石井 拓海

自分は、平和大使長崎派遣に行かせてもらい平和について今まで以上に知ることができました。また、同時に戦争や核についての悲惨さなどを知る事ができました。

初め、自分がテレビや本などで戦争や核について知っていた事がありましたが、長崎へ行って被爆者の話を聞いた時、自分の思っていた以上に悲しい話でした。自分の知っていたのは、本当は戦争の一部でしかないと思いました。

次は、被爆地を歩いて回る青少年ピースフォーラムに参加しました。そこでは石像の頭や腕がなく、爆発した時の破壊力を自分の目で確認しました。他にも爆風によって建物の柱がずれ、石が熱線によって焦げていて言い表せないほどの驚きでした。

そして、核の事についても勉強してきました。長崎で爆発したのは、上空五百メートルで、爆発当時の原爆の直下では三千度～四千度に達したそうです。放射線で苦しんだ人は一ヵ月も苦しみ亡くなったそうです。

最後に自分が学んだ平和についてです。戦争をしているのは平和ではないと思います。そして、いまだに他の国では、核を持っている国がたくさんあります。一番いいのは、核がこの世から無くなることだと思います。ですが、自分はそのような事はできないので、小さな事でも平和につながるような事を自分で心がけて友達に伝えていきたいです。

例えば、人の悪口を言わない、人に暴力をふるわないなどです。

『長崎平和大使』

金ヶ作中学校 1年 中川 剛志

今年の夏、ぼくは長崎へ平和大使として、松戸市の他校の中学生と一緒に、平和祈念式典と青少年ピースフォーラムに参加しました。

長崎へ出発する前日の八月六日。広島での式典をテレビで観ました。原子爆弾が落とされ六十五年もたって、初めてアメリカからの代表として駐日大使が参加した事を知り、少し驚きました。これほど長い間式典に参加しなかったのは、原爆投下を謝罪していると受け取られるのを心配した。アメリカの人々の中には原爆によって戦争を早く終わらせる事ができたと考える人も多いと新聞で読みました。

残念な事に、長崎での式典にはアメリカ大使は欠席でした。被爆者席の方々が「アメリカは、来てないらしいね。」「広島には出てくれたのに、どうして。」と、口々に言われているのを聞き、ぼくも悲しくなりました。

長崎原爆資料館や、青少年ピースフォーラムで、原爆の恐ろしさや、悲惨さに衝撃を受けました。これ程までにむごたらしいものとは思いませんでした。「かわいそうだ」などという軽い言葉では表せませんでした。

長崎市長の平和宣言で「核保有国の指導者の皆さん、『核兵器のない世界』への努力を踏みにじらないでください。」という言葉がありました。平和は大切だ。もう戦争は嫌だ。と多くの人々がこうして伝え合い努力していても、核兵器は一瞬でそれを踏みにじってしまうのです。

原爆を投下した国。投下された国。謝罪する。投下は正当なもの。という事は関係なく同じ人間として、こんな事は二度と起こしてはいけないと強く思いました。

『長崎で学んだことを忘れない』

和名ヶ谷中学校 3年 向田 美紀子

私が平和大使に応募した理由は、今年が終戦六十五年と節目の年を迎えると知り唯一の被爆国にいながらきちんと平和について考えないはいけないのではと思ったからです。

初めて長崎の町に立った時、本当に長崎にいるのかと思いました。バスがたくさん通っていて、町に人があふれていました。恐ろしい原爆が落され、たくさんの尊い命が亡くなった被爆した町とは思えませんでした。でも、原爆資料館で目の当たりにした一瞬で体が灰になってしまう熱線の強烈さ、一キロにも及ぶ建物を粉々にした爆風のすさまじさ、放射線をあびた後遺症の苦しみ、残酷で声が出ませんでした。

そして平和祈念式典に参列して、被爆された方の「核兵器を絶対に許すことができない」という話を聞いて、私は今まで戦争についてきちんと目を向けてこなかったことに後悔しました。とても胸が苦しい気持ちになりました。長崎の方々が平和に向けて頑張っている力強い姿を見て、自分でも出来ることをやろうと思いました。

青少年ピースフォーラムに参加した時、班のある人が「好きなだけご飯を食べられることが平和だと思う」と言いました。戦争がなければ平和だと思っていた私はそういうことも平和なんだなと感じました。

人々が笑顔でいられる世界であって欲しいと心から願います。被爆体験者のお話は、原爆で弟を亡くし、お母さんも妹も原爆症で苦しんだという辛い話でした。伝えていかなければという思いから話して下さり、私にも忘れることができない話となりました。核兵器は今まだ世界に存在しています。二度とこんな悲劇が起こらな

いように私は見たこと、聞いたことを忘れることなく、周りの人々に伝えていくことから始めます。

今回長崎で学んだこと、出会った人達のことを一生忘れません。

『平和への思い』

旭町中学校 2年 山本 ありさ

平和大使として長崎に行き、青少年ピースフォーラムと平和祈念式典に参加しました。

青少年ピースフォーラムでは班ごとに分かれ、平和とはどういうことなのかについて話し合い、意見交換をして色々な意見がでてきました。でも、私が思う平和とは、「いじめがなく、一人一人が楽しい生活を送っていただけること。」だと思いました。

平和学習では、原爆落下中心地や平和公園などを見学しました。その中でも私が一番印象に残ったのは、原爆の爆風で浦上天主堂遺壁の土台と土台のレンガがずれていたことでした。たった一発の原爆の爆風でずれてしまっていて、爆風の強さは恐ろしいものだと思います。

平和祈念式典では、黙とうの時に原爆が落ちた時の風景を色々と想像していました。もしあの時そこにいたら、私はどうなっていたのかと思うと、考えただけでとても怖くなりました。

黙とうが終り、席で話を聞きながら遺族席に座っている人たちを見ていると、あんなに多くの人が悲しんでいて、今でも六十五年前の傷が残っていると言うことがわかりました。なので、自分なりに平和について周囲の人達に話し、今自分ができることを一生懸命やっていき、たくさんの人に、「今私たちが平和な世界でいられることは、幸せなんだ。」と言うことをわかってもらいたいです。

今回は、このような貴重な体験をさせてくださり、ありがとうございます。このことをふまえ、これからの人生に活かしていけるようにしたいです。

『長崎で学んだこと』

小金北中学校 1年 新倉 花菜

私は、8月7日から8月10日まで、松戸市の平和大使として、長崎に行きました。

2日目、青少年ピースフォーラムの開会行事で実際に被爆体験をした永野悦子さんの話を聞きました。永野さんは、原爆で家族全員を亡くしたそうです。弟と妹は原爆が落とされる少し前まで、鹿児島にいたけれど永野さんが無理やり長崎に連れてきてしまったそうです。そのことがあり、お母さんと長い間会話をするのがなかったそうです。私は、もしそれが自分の立場であったらと考えると、すごく複雑な気持ちになりました。自分が連れてきたせいで、弟と妹が死んでしまったら、それなのに自分だけ生き残ってしまったら・・・、私がそんなことになったら、その後、生きていけないと思います。そんなことがあっても1人でもしっかり生きて、今、たくさんの人に自分が体験したことを話している永野さんは、すごく強い人だなと思いました。

3日目、平和祈念式典に参列しました。11時2分に黙とうをしました。私は、65年前の今、この長崎に原爆が落とされたと考えていたらとても怖くなりました。でも、そんな体験をして、乗り越えてきた人もたくさんいます。そう考えたら、自分もその人たちの為に出来ることをやっていかないといけないと思いました。

私は長崎に行って原爆がどれほど恐ろしいものなのか、そして、原爆のせいでどれほどの人が亡くなってしまったのかということなどを学ぶ事ができました。これからは、日本を最初で最後の被爆国にするために、長崎で学んだことをたくさんの人に伝えていきたいと思います。

『「平和」の再確認』

聖徳大学付属女子中学校 2年 田村 陽香

私は長崎への派遣を通じて、派遣前に抱いていた平和に対する考え方や被爆した町への見方が変わった。

一つ目は平和の尊さである。派遣前は戦争さえなくなれば平和になると思っていたが、平和になるとは戦争がなくなるのはもちろんのこと、これだけではなく普段私達が当たり前と思っている友達の存在、健康な状態などがあってはじめて成り立っているものだと感じるようになった。

二つ目は原爆の恐ろしさと与えた影響の甚大さである。長崎に投下されたたった一発の原爆で、愛する人を亡くした方、六十五年たった今でも日常生活に支障が出てしまう方、自分の子孫にもガンなどの後遺症の障害を与えてしまうのではないかと心配する方も少なくなかった。さらに長崎には、原爆の熱線で赤くなってしまった石や爆風によってゆがんでしまった建物が多く残っていて核兵器の恐ろしさを痛感した。

今回、この松戸市平和大使に参加して平和とは何なのかということをたくさん学ぶことができた。長崎などの被爆地に行かないとわからないことを経験し、学び、吸収することができた。私は長崎派遣で学んだ事を同世代の人達、次の世代の人達、さらにはもっと後の世代に生きる人々に伝え世界恒久平和の実現を願っている。そして今、私はこの企画に携わってくださった方々、私達を送り出してくださった方々、長崎での学習の手伝いをしてくださった方々に大変感謝している。これからも平和の取組に参加する機会をみつけ、積極的に参加していきたいと思うようになった。

『命の大切さ』

専修大学松戸中学校 1年 染谷 日向子

私は長崎へ行く前、自分に平和大使が務まるか、とても不安でした。でもこんな私のちっぽけな不安より、戦争を経験した人々の不安の方がよっぽど重いものだと思います。

平和大使になるまでは、戦争なんて私には関係ないと思っていました。しかし今回、平和大使として長崎を訪れ、戦争の悲惨さを考えさせられました。

二日目、青少年ピースフォーラムに参加しました。その中のフィールドワークでは、浦上天主堂の遺壁が爆風により、ずれてしまったこと、平和祈念像は天を指した右手が原爆の恐ろしさ、水平に伸ばした左手が平和、軽く閉じた目が亡くなった人々へのご冥福を表していることなどを教えていただきました。

中でも私が心に残ったのは、平和の泉にあった黒い石です。その黒い石には、被爆当時九歳だった女の子の手記が刻み込まれていました。その手記の内容は「どうしても水が飲みたいくて油がういていることが分かっていたけれどその水を飲んでしまった。」というようなものでした。今は水を飲みたいと思ったときに飲むことができるけれど、その女の子は油の浮いた水しか飲めなかったんだなと思い胸が苦しくなりました。

三日目、平和祈念式典に参列しました。十一時二分、私は黙とうをしている間あることを考えていました。それは、今起きている自殺とか幼児虐待とかそういう嫌な事件のことです。死にたくななくても死んでしまう人々がいる中で、自ら命を投げ出したり、人を傷つけて殺したりするのはもうやめてほしいと思います。

これからは、命の大切さをもっとよく考えて、無駄に命がなくなってしまうとい

うことは、起こらないでほしいと思いました。

平和大使長崎派遣を終えて

総務課随員 保土田 有希子

今年で平和大使長崎派遣も3回目を迎えます。

平成20年度に10名、平成21年度には15名、平成22年度には市内各中学校から各1名の22名の中学生を長崎に派遣することができました。

私自身は、初年度に行って以来、2回目の随員を経験させていただくことになりました。大使の人数も22名と多くなり、全く違う学校、異なる学年、普段は接点を持たない、性格も様々な中学生が結団式から3回のオリエンテーションを経て事前学習をしていきます。大使の緊張感がこちらにも伝わってきてその様子はすごく新鮮で微笑ましくもあります。

一昨年、長崎市を訪れたとき、青少年ピースフォーラムの被爆体験講話で吉田勝二さんのお話を聞かせていただきました。そのお話を真剣に目に涙を浮かべてじっと聞き入っていたそのときの大使10名の様子がよぎりました。

吉田さんは、長崎県立長崎工業学校造船科に在学中、13歳で原爆の熱線を浴び大火傷にあい、特に顔面に深い傷跡を残しました。自らの体をさらして、原爆の無惨さと「人の痛みがわかる心を持つこと」を訴えてくださいました。その吉田さんが、今年平成22年4月に肺がんで亡くなりました。生きている限り、語り部として思いを伝えていきたいと語っていた元気な姿が同じ会場に入ると思い起こされました。

今年も、全国からたくさんの青少年が長崎市に集い、ピースフォーラムに参加しました。しかし、被爆者は高齢化を迎え、毎年祈念式典に参列できる被爆者は少なくなりつつあります。心と体の痛みをこらえて、自らの体験を未来のために語ってくださる語り部の方がいます。今年も永野さんが50年間胸の中にしまって口にすることが出来なかったという、弟と妹を亡くした自らの体験を語ってくださいました。そして長崎市では、被爆者たちの思いを受け継いで、平和のために行動している、市民や高校生や大学生の姿がありました。

平和大使が4日間を通して、帰庁したとき、被爆地で感じて、経験したことを自分の言葉で確り報告している姿を目にしたときは、行ってよかったと心から思いました。そして大使に忘れられない思い出として、忘れてはいけない思いとして、しっかりと受け継がれ、彼らに継承できたと感じております。

最後に、ご協力をいただきました保護者の方をはじめ関係者の皆様、さらには長崎市のボランティアの皆様に心よりお礼申し上げます。

今年の平和大使長崎派遣は、市内中学校22校より69名の応募があり、公開抽選により各学校1名の22名が第3回平和大使として選ばれました。大使との初めての顔合わせとなる結団式では、緊張しているようで、不安でありましたが、3回のオリエンテーションを行っていくうちに、徐々に仲良くなり、一人一人が自分の意見を発言できるようになり不安もなくなりました。

いよいよ8月7日出発の日となり、大使22名全員が無事に長崎空港に到着し、長崎市内に向かいました。その日の夜は、長崎原爆資料館へ献納する千羽鶴を完成させ、スローガンを決めるにあたり、リーダーを中心に話し合い、一年生も積極的に意見を発言し全員で話し合った結果、『平和の祈りを全ての命へ』という平成22年度平和大使のスローガンが決定しました。

二日目の午前中は自主学習で2班に分かれ、Aグループは立山防空壕、中華街を見学し、Bグループは長崎歴史文化博物館、出島ワープを見学しました。午後からは全員で原爆資料館に向い、完成させた千羽鶴を『平和の祈りを全ての命へ』の気持ちを込め献納しました。この日は青少年ピースフォーラムの開会行事があり、永野悦子さんの被爆体験講話を真剣に聞いている姿、フィールドワークにてボランティアの方の説明により被爆建造物を見学しメモを取る姿を見て、実際に原爆の恐ろしさ、悲惨さを大使たちは学ぶことができたと思います。

三日目は平和祈念式典へ参列し、原爆投下の11時2分に恒久平和を願い、追悼の意を込め黙とうを行いました。午後からは平和学習として全国から参加した青少年とともに身近にある平和について、グループに分かれ問題点、解決策を意見交換し、大使たちは自分の意見を積極的に発言し、中にはグループの中心となりまとめている大使も見受けられました。貴重な体験になったと思います。

翌日は、22名全員が無事に市役所に帰庁し帰庁報告会を行いました。報告会では、大使一人一人がこの平和大使長崎派遣で見て、聞いて学んだ思いを市長に対し堂々と発表している姿を見て、非常に感動いたしました。

私自身も今回初めて、平和大使長崎派遣事業の担当となり随行するにあたり不安でありましたが、22名の大使の皆さんに出会えたこと、無事に終えられたことを、心よりうれしく思っております。この4日間で学んだ貴重な体験を、家族、友人に伝えて頂き、皆さんの今後の活躍を期待しております。

最後に、長崎でのガイド、ボランティアをして頂いた方々、この事業にご協力して頂きました保護者の皆様、さらに関係者の皆様に、この場をお借りいたしまして、心よりお礼を申し上げます。

「みんな、ちゃんと感じて学んで考えてくれたんだな」

8月10日、報告会で一人一人自分の言葉で市長に話している大使たちを見て、私はとても嬉しくなりました。

遡ること約1ヶ月前、7月11日に大使たちは初めて顔を合わせました。

「中学生って、こんなに小さかったっけ・・・」

それが、第1回のオリエンテーションの時の大使たちの第一印象でした。

大使たちが私服で集まった第2回のオリエンテーションでは、制服の時よりもさらに幼く見え、「みんな長崎で色々と感じて吸収してちゃんと考えてくれるかなあ」と若干心配になりました。

でも、その心配は杞憂でした。

1日目の夜、移動で疲れているにも関わらず、大使たちは原爆資料館に寄贈する千羽鶴に添えるメッセージについて真剣に話し合っていました。

2日目、疲れが若干出てしまった大使もいましたが、永野悦子さんの被爆体験講話の時は、みんな一生懸命メモを取りながら聴いていました。その後のフィールドワークでは、被爆遺構を見たり触れたりしながらピースボランティアに熱心に質問していました。

3日目、平和祈念式典では被爆者代表の内田保信さんや田上長崎市長・菅首相などの言葉に耳を傾け、それぞれの願いや思いを一人一人が静かに受け止めていました。午後の平和学習では、「平和とは」「平和ではないとは」どういう状況か？「平和にするには」どうしたらいいか？等、日本各地から来た中学生たちと一生懸命考え、積極的に話し合っていました。

そして4日目、飛行機や羽田からのバスの中ではさすがに寝ている大使が多かったのですが、冒頭のとおり帰庁後の報告会で、長崎での4日間で吸収したことや考えたことを、一人一人が自分の言葉で報告してくれました。

私自身、このような随員という仕事は初めてで、多少の不安もありました。猛暑ゆえに熱中症も心配でしたが、この夏の長崎は8月9日に限り雨模様で涼しく、平和祈念式典の会場のテントの下は比較的過ごしやすく助かりました。大使たち22人全員が無事に帰って来ることができたのは、保護者の皆様、長崎の関係者の皆様、そして大使たち本人・・・多くの方々のおかげです。100点とは言いませんが、実り多く有意義な、95点ぐらいの平和大使長崎派遣になったのではないかと思います、感謝の念で一杯です。

素直で優しい大使たちには、いつまでも、他人の苦しみや悲しみを他人事と見ないで一緒に受け止められる人間であってほしいと思います。

可能性に溢れる大使たちの、今後の活躍を願います。

長崎平和宣言

被爆者の方々の歌声で、今年の平和祈念式典は始まりました。

「あの日を二度と繰り返してはならない」という強い願いがこもった歌声でした。

1945年8月9日午前11時2分、アメリカの爆撃機が投下した一発の原子爆弾で、長崎の街は、一瞬のうちに壊滅しました。すさまじい熱線と爆風と放射線、そして、燃え続ける炎……。7万4千人の尊い命が奪われ、かろうじて死を免れた人びとの心と体にも、深い傷が刻みこまれました。

あの日から65年、「核兵器のない世界」への道を一瞬もあきらめることなく歩みつづけ、精一杯歌う被爆者の姿に、私は人間の希望を感じます。

核保有国の指導者の皆さん、「核兵器のない世界」への努力を踏みにじらないでください。

今年5月、核不拡散条約(NPT)再検討会議では、当初、期限を定めた核軍縮への具体的な道筋が議長から提案されました。この提案を核兵器をもたない国々は広く支持しました。世界中からニューヨークに集まったNGOや、私たち被爆地の市民の期待も高まったのです。

その議長案をアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国の核保有国の政府代表は退けてしまいました。核保有国が核軍縮に誠実に取り組まなければ、それに反発して、新たな核保有国が現れて、世界は逆に核拡散の危機に直面することになります。NPT体制は核兵器保有国を増やさないための最低限のルールとしてしっかりと守っていく必要があります。

核兵器廃絶へ向けて前進させるために、私たちは、さらに新しい条約が必要と考えます。潘基文国連事務総長はすでに国連加盟国に「核兵器禁止条約」の検討を始めるように呼びかけており、NPT再検討会議でも多くの国がその可能性に言及しました。すべての国に、核兵器の製造、保有、使用などのいっさいを平等に禁止する「核兵器禁止条約」を私たち被爆地も強く支持します。

長崎と広島はこれまで手を携えて、原子爆弾の惨状を世界に伝え、核兵器廃絶を求めてきました。被爆国である日本政府も、非核三原則を国是とすることで非核の立場を明確に示してきたはずですが、しかし、被爆から65年が過ぎた今年、政府は「核密約」の存在をあきらかにしました。非核三原則を形骸化してきた過去の政府の対応に、私たちは強い不信を抱いています。さらに最近、NPT未加盟の核保有国であるインドとの原子力協定の交渉を政府は進めています。これは、被爆国自らNPT体制を空洞化させるものであり、到底、容認できません。

日本政府は、なによりもまず、国民の信頼を回復するために、非核三原則の法制化に着手すべきです。また、核の傘に頼らない安全保障の実現のために、日本と韓国、北朝鮮の非核化を目指すべきです。「北東アジア非核兵器地帯」構想を提案し、被爆国として、国際社会で独自のリーダーシップを発揮してください。

NPT再検討会議において、日本政府はロシアなど41か国とともに「核不拡散・軍縮教育に関する共同声明」を発表しました。私たちはそれに賛同すると同時に、日本政府が世界の若い世代に向けて核不拡散・軍縮教育を広げていくことを期待します。長崎には原子爆弾の記憶と爪あとが今なお残っています。心と体の痛みをこらえつつ、自らの体験を未来のために語ることを使命と考える被爆者がいます。被爆体験はないけれども、被爆者たちの思いを受け継ぎ、平和のために行動する市民や若者たちもいます。長崎は核不拡散・軍縮教育に被爆地として貢献していきます。

世界の皆さん、不信と脅威に満ちた「核兵器のある世界」か、信頼と協力にもとづく「核兵器のない世界」か、それを選ぶのは私たちです。私たちには、子供たちのために、核兵器に脅かされることのない未来をつくりだしていく責任があります。一人ひとり弱い小さな存在であっても、手を取りあうことにより、政府を動かし、新しい歴史をつくる力になります。私たちの意志を明確に政府に伝えていきましょう。

世界には核兵器廃絶に向けた平和の取り組みを続けている多くの人々がいます。長崎市はこうした人々と連携し、被爆地と心をひとつにした地球規模の平和市民ネットワークをはりめぐらせていきます。

被爆者の平均年齢は76歳を越え、この式典に参列できる被爆者の方々も、少なくなりました。国内外の高齢化する被爆者救済の立場から、さらなる援護を急ぐよう日本政府に求めます。

原子爆弾で亡くなられた方々に、心から哀悼の意を捧げ、世界から核兵器がなくなる日まで、広島市とともに最大限の努力を続けていくことを宣言します。

2010年（平成22年）8月9日

長崎市長 田上 富久

以下、長崎平和宣言<ことばの解説>から抜粋

◆核不拡散条約（NPT）

（1）核不拡散条約

核不拡散条約（NPT）は、核兵器保有国が増える（拡散する）ことを防ぐ目的でつくられた条約で、1970年（昭和45年）に発効されました。2003年（平成15年）1月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中での加盟国は190カ国です。加盟していないのは、インド、パキスタン、イスラエルの3カ国です。

核兵器の拡散を防ぐため、それまで保有していたアメリカ・ロシア・英国・フランス・中国の5カ国だけに核兵器の保有を認め（核保有国）、それ以外の国が保有することを禁止しています（非核保有国）。

そのため、核保有国には、核兵器を減らすための交渉を誠実に行うことを求め（第6条）、非核保有国には核兵器の製造、取得を禁じています。

非核保有国には、原子力の平和利用が認められており、原子力発電所を建設する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関（IAEA）の検査を受ける義務があります。

しかし、イランは、原子力の平和利用を名目に核兵器を開発している疑いをもたれ、また、核保有国の核兵器の削減も進んでいないなど、多くの問題を抱えています。

核兵器の保有国を増やさないためにも、この条約を各国が真剣に取り組むことが求められています。

（2）再検討会議

核不拡散条約（NPT）では、核兵器の軍縮や拡散の状況を定期的に検討するため、5年毎に核不拡散条約再検討会議が開かれます。発効から25年後の1995年（平成7年）には、条約の延長を検討する「再検討・延長会議」が開かれ、無期限延長が決められました。

2000年（平成12年）の核不拡散条約再検討会議では、核保有国による核軍縮への努力が不足しているとの声が高まり、「核兵器の全面廃絶に対する核兵器保有国の明確な約束」を盛り込んだ合意文書が採択されました。

しかし、2005年（平成17年）の再検討会議は、核保有国と非核保有国の意見が鋭く対立し、成果もなく閉幕しました。

2010年（平成22年）の再検討会議は前年、アメリカのオバマ大統領が登場し、「核兵器のない世界」への機運が高まる中で開催されました。2005年（平成17年）の再検討会議では最終文書の採択はできませんでしたが、2010年（平成22年）の再検討会議では、核軍縮に向けた64項目の行動計画を柱とした最終文書が採択されました。

◆核兵器禁止条約

核兵器の開発、実験、製造、配備、使用をすべて禁止して、また、現在、保有している核兵器を解体して使えなくする条約です。

核兵器禁止条約は、国際司法裁判所が 1996 年(平成 8 年)に「核兵器の使用・威嚇は一般的に国際法に違反する」とした勧告的意見が始まりとなりました。1997 年(平成 9 年)に国際反核法律家協会など 3 団体が、「核兵器は違法」とする考えにもとづいて、モデル核兵器禁止条約の案を発表し、同じ年にコスタリカ政府が国連に提出しました。

2007 年(平成 19 年)には、コスタリカとマレーシア両政府が、核不拡散条約(NPT)再検討会議準備委員会、国連総会に改訂版の条約案を提出、2008 年(平成 20 年)には潘基文(パン・ギムン)国連事務総長も、核軍縮に関する 5 項目の提言を発表して、禁止条約の検討を加盟各国に求めています。

◆非核三原則

非核三原則とは、核兵器を「持たない」「つぐらない」「持ち込ませない」という被爆国である日本政府の 3 つの原則のことです。

1967 年(昭和 42 年)12 月、当時の佐藤栄作首相が国会(衆議院の予算委員会)で表明しました。1971 年(昭和 46 年)11 月の衆議院で沖縄返還に関連して、初めて国の方針(国是)として決議(国会の意志を決めること)が行われました。

◆核密約

非核三原則の「持ち込ませず」については、実体は形骸化しているのではないか、という疑惑がたびたび指摘されてきました。

近年、複数の元外務事務次官の証言や、アメリカ高官の発言、アメリカで開示された公文書など「密約」の存在を示唆する事実が次々にあきらかになるなかで、日本政府は、2009 年(平成 21 年)に「有識者委員会」を設けて検証を進めました。

2010 年(平成 22 年)3 月、外務省の有識者委員会の検証結果を受けて、日米間には暗黙の合意による「広義の密約」など、3 つの密約の存在をあきらかにしました。

「広義の密約」とは、事実はわかっていながら、あえて問題にしないで、容認してきたという「広い意味での密約」ということです。

1960 年(昭和 35 年)の日米安保条約改定時、アメリカ軍による「核の持ち込み」は事前協議の対象とすることを日本政府とアメリカ政府は確認しました。

日本政府は、核兵器の領土内への持ち込みだけでなく、核兵器を積んだ船が領海内の通過や、港に立ち寄ることも、当然、「持ち込み」にあたると考えていまし

た。

しかし、アメリカ政府が、「核搭載艦船の寄港、通過は核兵器の持ち込みに当たらない」と解釈していることも、日本政府は知りながら、同盟の維持などの政治的判断にもとづき、「持ち込み」に関する認識のちがいをあえて突き詰めることをしないで、事実上、核兵器の持ち込みを黙認してきました。

当時の政府は、アメリカ政府から事前協議の申し出がない以上、領海内を通過、寄港する艦船も核兵器を搭載していないとの立場から説明をくりかえし、アメリカ政府も「核兵器の存在を否定も肯定もしない」という戦略上の方針を貫くなかで、非核三原則の国是としての実態が形骸化された状態が長く続くことになりました。

◆原子力協定

核不拡散条約（NPT）に加盟した国々には、核軍縮と核不拡散に取り組む義務と同時に原子力を平和利用する権利が与えられます。

原子力の平和利用の権利のひとつとして、原子力発電等の高い技術をもつ国から、資機材や技術などの提供を受ける原子力協力があります。

原子力発電の高い技術をもつ日本は、アメリカ、英国、フランス、カナダ、オーストラリアなどと協定を結んでいます。

インドは核不拡散条約（NPT）に加盟しないまま、1998年（平成10年）にも核兵器の保有を宣言しました。当時は国際社会の大きな反発をまねき、国連安保理の制裁や経済制裁に受けることになりました。

現在もNPTに加盟もしてはいませんが、インドの急速な経済発展を背景に、先にアメリカがインドと原子力協定を締結しました。2010年（平成22年）6月、日本政府もインドとの原子力協定の締結にむけて、話し合いを開始しましたが、インドの核兵器は不問のまま、軍事用の原子炉を査察もしないで放置することになります。

被爆地の広島と長崎は、インドへ原子力関連の協力は、「NPT体制の崩壊につながりかねず、核廃絶を進める上で重大な支障となる」として日本政府に対して交渉の停止と被爆国としての慎重な対応を要請しました。

◆北東アジア非核兵器地帯

北東アジア非核兵器地帯とは、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約として成立するためには、3か国に核兵器が存在せず、核保有国（中国、ロシア、米国）は、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

日本では、1971年（昭和46年）に「非核三原則」の国会決議が行なわれ、また、韓国と北朝鮮による、「朝鮮半島非核化共同宣言」が、1992年（平成4年）

に発効するなど、それぞれの国が非核化を表明しました。

しかし、2006 年（平成 18 年）10 月、北朝鮮が核実験を実施し、北東アジアの平和と安全が大きく脅かされました。さらに、2009 年（平成 21 年）5 月 25 日、北朝鮮は、2 回目の核実験を実施し、「北東アジア非核兵器地帯」の前提となる朝鮮半島の非核化の実現は、さらに困難な状況になりました。

今後、国際社会が結束して、北朝鮮の核を放棄させることが、「北東アジア非核兵器地帯」の実現には必要となります。

◆核不拡散・軍縮教育

2010 年（平成 22 年）5 月 11 日、ニューヨークの国連本部で開催中の核不拡散条約（NPT）再検討会議において、日本政府は、41 か国とともに、「核不拡散・軍縮教育に関する共同声明」を発表しました。核兵器国として唯一ロシアが共同提案に参加しました。

共同声明は、

- （１）「核兵器のない世界」の実現のため軍縮・不拡散教育の果たす役割の重要性
 - （２）核兵器の破壊力などに関する教育の重要性
 - （３）各人が核不拡散・軍縮の促進に主体的に貢献できるような教育の重要性
 - （４）各国政府、国連、国際機関、市民社会、NGO の間の協力促進の重要性
- などを主な内容としています。

核兵器の廃絶のためには次世代への教育が重要であり、世界的な核軍縮教育の取り組みが期待されます。



平成 22 年度
平和大使長崎派遣事業報告書
～平和の祈りを～

松戸市
総務企画本部総務課

平成 22 年 11 月発行